

釣り場時評 37

ブラックバス 駆除騒ぎに 感じる 気味悪さ

水口憲哉

水口憲哉 東京都水産総合センター 水産部 水産資源課 課長

いわゆる外来魚問題、ブラックバスをどうするかにはまり出して二年近く経つが、バスが好きでどうしてもバスが守りたいというわけでもないのに、このところのバスバッシングとかブラックバスを駆除せよという声高な動きには何か気味悪さを感じてしまう。

例えば、二月末から三月初めにかけて、環境省が皇府外苑・牛が淵沼において実施した外来魚駆除事業であるが、これは「水質状況調査・ゴミ清掃及び在来種保全移入魚類調査を作業」というそうだが、要は牛が淵沼が外来魚によって侵襲され在来魚が危惧状況にあることを検証し、広く社会に問題を知らせることが当初の目的であったようだ。しかし、蓋を開けてみればというが、極い細りしてみたら、捕獲された魚種の87%が在来種でブラックバスの割合は

0.6%だったという。ここで皇居の沼の在来種が何で、どんな魚が移入種かという検討を始めたすとややこしくなるのでそれはさておくと、このブラックバス騒ぎは何なのさということになる。マスコミを始め世間は外来魚・ブラックバスという幻とか幽霊に感わされているのではないだろうか。そこには一つの思い込みというカレツテルりがある。

(A)魚食性外来魚のブラックバスは他の在来魚を食い尽くす。(B)その結果、湖沼や河川はバスだらけになる。(C)それは日本在来の淡水魚の絶滅であり生態系の破壊である。

皇居の沼といっても単に切れ残った江戸時代からの堀割でしかなく都市の中にかろうじて維持された大きな水溜りに過ぎない。たしかひところ水草が繁茂し過ぎたのでソウキョを放流したとか水体にとつては迷惑で過保護な人の手が様々に加えられているかもしれないが、日本古来の生態系といったものとはほど遠い。むしろ、昨年まで水質汚濁ワーストワンだった手賀沼に次ぐような懸濁物質SSの量が多く透明度の低い、そしてあらゆるガラクタの多い魚にとつては暮らしていくに汚れ切った沼と言える。そのことを今回の調査で捕獲された魚種組成が如実に示している。一万二千個体以上の中で目立って割合の多いのは、71%のモツゴ(マナギ)と共々に12%のスマチチアブ(アサギ)とブルーギルである。他はほとんど1.3%から0.02%と極少である。それは多い順に、ウギゴリ、コイ(両センチ以上)、トウヨシノボリ、ワカサギ、ブラックバス、ギンブナ、ゲンゴロウブナ、ジュズカケハゼ、ソウキョ(1センチ未満)、レンギョ(1センチ未満)、ウナギとなる。

この魚種構成比率から次のようなことが見えてくる。

① これら14種の魚のこの牛が淵沼への生息起源は、(ア)沼が出来たときからの子孫の生き残り、(イ)流入水など沼の水の入れ換えにともなって流入した稚魚や親魚そしてそれらの子孫の生き残り、(ウ)人の手によって放流されたものの、の3グループが考えられ、確定はできないがこのうち8種ほどが(ア)のグループに入る。

② 1000個体以上いたモツゴなど3種を除く稀少種は、自然繁殖を全くしていないか、行っていないかろうじてという状態であり、放流や流入も行われずこのままの状態が続けば早晩この牛が淵では姿を消してしまうだろう。

③ 筆者らの手賀沼での調査では、稚の親魚が産み付けられた卵に懸濁物質が沈殿付着しないよう、また貧酸素水が影響しないように口や鱗を使って保護しているモツゴが大量に自然繁殖し、コイやフナは放流によってその数が保たれているという結果が出たが、この皇居の沼でも同様のことが起こっていた。なお、スマチチアブも親魚が同様の保護を行う。

④ ブルーギルがスマチチアブと同様に多数捕獲されているがその理由は不明であり研究室ではその研究を始めている。ただし、手賀沼では、現在外来魚駆除ということで進められる魚の95%がブルーギルという数字と今回の調査結果が一致し過ぎるのには不思議というしかない。漁獲される魚全体に対するブラックバスの重量比が今回とほぼ同じというのも驚きである。なお、霞ヶ浦ではブラックバスが大きく減ったの

7月の雑誌 10.61
2003年初夏号